The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

『太平広記』明野竹斎鈔本について

―巻三「漢武帝」を中心に―

屋敷信晴

一　はじめに

北宋創業間もない太平興国年間、時の皇帝太宗は勅命によって『文苑英華』『太平御覧』『太平広記』といった大規模な類書を幾つか編纂させた。これは、兄太祖の子から二世皇帝の地位を簒奪した太宗が、当時の知識人に仕事を与えて懐柔するための政策であったとも言われるが、[1]後世に与えた影響から言えば、大変に意義のある文化事業でもあった。そして、この時編纂された類書群の中でも少々特殊な位置を占めているのが、『太平広記』である。

『太平広記』は約七千篇の文言小説を蒐集し、その内容によって九十二の部に分類した類書である。この書の特殊性は、その蒐集の対象に尽きる。初・盛唐に編纂された『藝文類聚』『初学記』等の『太平広記』に先立つ類書を見てみると、大きな違いがあることに気づく。それは、『藝文類聚』などの伝統的な類書に引用されている記述の殆どは、経書・史書・諸子の類、また先人の詩文である。これは、そもそも類書は主に詩文を作る際に先人の用例や、適当な典故を探すための参考書として使われたのであろうことを考えれば、当然のことである。だが『太平広記』は、詩文の典故としては使いにくいと思われる「小説」（取るに足らぬ話）から殆どの記述を蒐集しており、これは類書としてはかなり特異なことであると言わざるを得ない。

しかし、確かに『太平広記』は類書としてはかなり特異なものではあるが、一面では他の類書とは比べものにならないほどの貴重な価値を持っている。それは、『太平広記』には他書に見られない小説の佚文が相当数引用されているということである。中国では小説が取るに足らぬ話と考えられた為か、元の形を保ったまま今に伝えられた六朝・唐代の古小説は殆ど無い。『搜神記』など、現在見ることができる古小説の多くは、恐らく明代頃に佚文を蒐集して復元したものだと思われる。その際、最もまとまった数の佚文を保存し、中心資料となったと思われるのが、『太平広記』なのである。古小説研究の基

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

本資料である魯迅『古小説鉤沈』『唐宋伝奇集』、汪辟疆『唐人小説』も、『太平広記』から相当数の話を抽出している。もし『太平広記』が無かったら、現在に伝わる古小説は半減どころではない。その意味では、『太平広記』は文言小説を研究する上で最重要の書であると言っても過言ではない。

従来『太平広記』を材料にした文言小説研究は行われていても、『太平広記』そのものについての研究はあまり行われていなかった。現在『太平広記』の通行本とされるのは、人民文学出版社と中華書局から刊行された点校本であるが、このテキストはかなりの問題を含んでいることが既に指摘されている。だが、それに代わるテキストが未だ存在しないのが現状である。しかし近年、中国では『白話太平広記』と題する全訳が複数出版され、日本でも部分的ながら、邦訳が発表され始めている。[②] 中でも、張国風氏の一連の研究を初めとする、『太平広記』のテキストについての研究に内外の関心が集まっている。[③] そこで本発表では、『太平広記』の諸本の中でも重要なものと考えられる中国国家図書館（旧北京図書館）所蔵の明野竹斎鈔本の性格について、巻三「漢武帝」を材料として若干の気づきを報告したいと思う。

二　『太平広記』のテキストについて

『太平広記』の主編者である李昉の『太平広記』序に拠れば、『太平広記』は太平興国三年（九七八）八月十三日に完成、同八月二十五日史館に送付、六年正月に勅命によって版木に彫られたという。しかし、その後の流伝の過程は謎に包まれている。この事情については、王応麟『玉海』巻五十四所引『宋会要』の注記がしばしば引用される。

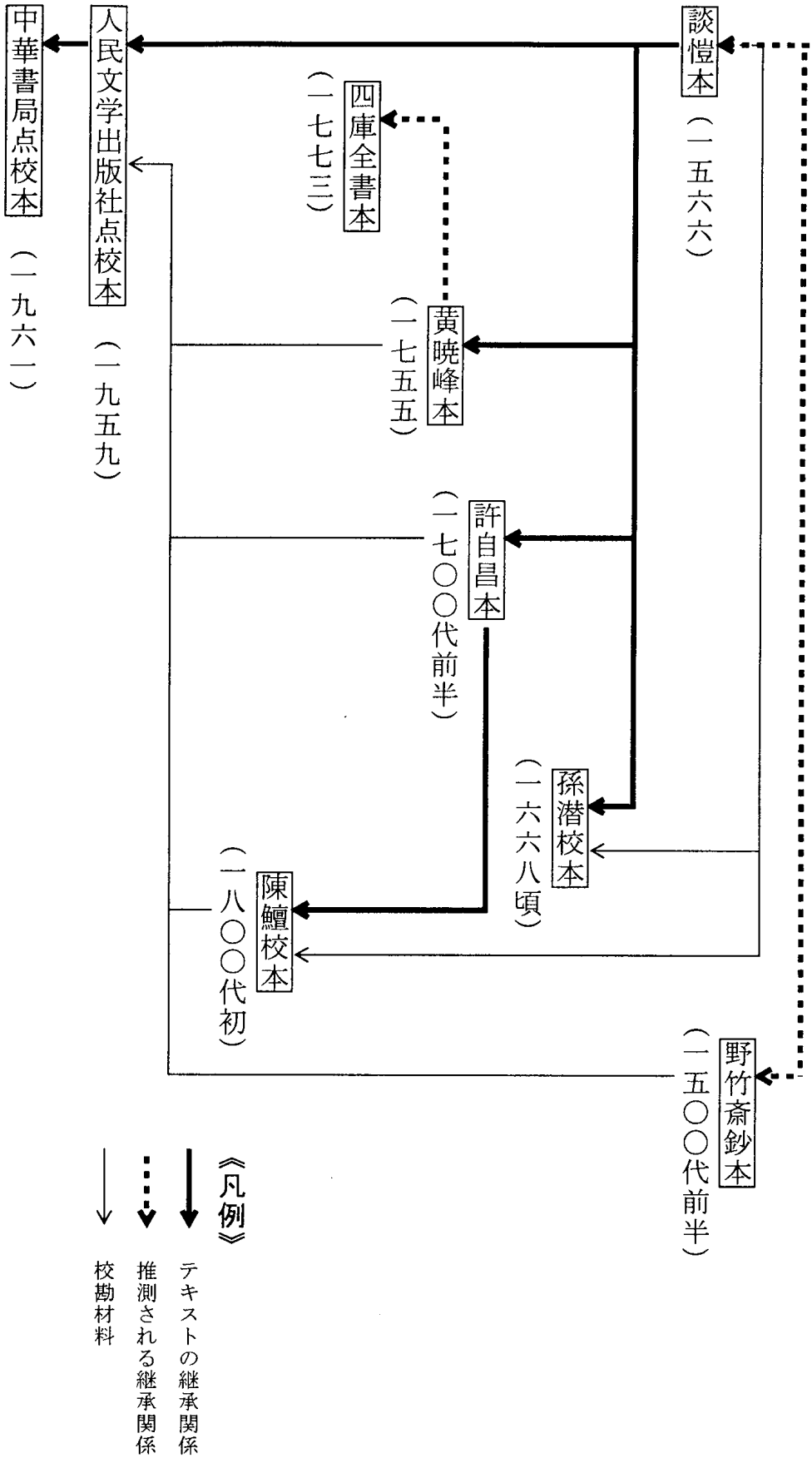
『廣記』鏤本頒天下、言者以爲非學者所急。收墨板藏太清樓。（『広記』の鏤本 天下に頒せんとするに、言ふ者 以為へらく学者の急とする所に非ずと。墨板を収めて太清楼に蔵す。）

この文によって『太平広記』は、版木までは彫られたものの、結局その版木はしまい込まれて刊行されることはなかったというのが通説になっていた。しかし近年、この説に疑義が提出されている。それは『玉海』のこの文の前後に記された時間的順序が李昉の「『太平広記』表」と一致しなかったり、同時期に編纂された『太平御覧』と混同している部分があったりするなど、信憑性にやや欠けていること、[④] そして蘇軾『東坡題跋』や陸游『老学庵筆記』に『太平広記』からの引用があったり、宋代の書目に『太平広記』を載せるものがあるなど、宋代には広い範囲で『太平広記』が読まれていたという記録が散見するからである。

その後、明の嘉靖四十五年（一五六六）に談愷という人物がどこからか鈔本を手にいれ、それに校訂を施して刊行したのが、談愷本である。次頁資料1に示すように、

NII-Electronic Library Service

【資料1】『太平広記』主要諸本の系統



NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

この談愷本からは、許自昌本、黄暁峰本などのテキストが派生する。現在『太平広記』の通行本とされるのは一九六一年に中華書局から刊行された中華書局点校本であるが、この本も談愷本を底本として、それに汪紹楹氏が主要諸本によって校訂を施したものである。つまり現在行われている『太平広記』の殆どは談愷本の系統に連なるものなのだが、そもそもその大元になった鈔本は全く素性が分からないもので、北宋から六百年もの間、どのように流伝してきたものであるかは明らかにはなっていない。

談愷本系以外の系統の姿を伝えると言われる『太平広記』としては、孫潜校本（孫校本）、陳鱣校本（陳校本）、そして明野竹斎鈔本（明鈔本）の三種がある。孫校本とは、清の孫潜が手にいれた宋本によって談愷本を校訂し、その結果を談愷本に書き込んだもので、現在台湾大学図書館に所蔵されている。[5] 陳校本は、清の陳鱣がやはり宋本によって許自昌本に校訂を施したもので、現在中国国家図書館に所蔵されている。どちらも、校勘に用いられた宋本は現在失われてしまっており、それぞれ書き込みがある談愷本と許自昌本が残されているのみである。

そして本発表で扱う明鈔本は、明の沈与文が所蔵していた鈔本であり、彼の書斎の名を取って「野竹斎鈔本」と呼ばれる。このテキストは前述の点校本の校勘材料として用いられており、談愷本とは相当の異同があることが知られているが、未だ影印や校勘記といった形で全貌が紹介された事がない、幻の書となっている。現在は中国国家図書館所蔵となっており、書籍番号はA〇一五一七、十巻ごとに一冊にまとめられている。半葉十二行、一行二十二字前後。上象鼻には「呉郡沈氏」、下象鼻には「野竹齋校録」と記されている。

張国風氏の考証に拠れば、[6] 沈与文は明の成化八年（一四七二）生まれであり、談愷本が刊行された嘉靖四十五年（一五六六）には九十五歳となってしまうため、談愷本刊行以前に既に書写されていただろうと述べられている。また異同の状況が孫校本の校勘記とよく一致するので、明鈔本の元になったテキストは宋本、或いは元本であろうとも指摘されている。ただし張氏は明鈔本と談愷本がどのように違うのか、具体的な例を挙げて述べられてはいない。[7] そこでまず、明鈔本と談愷本系のテキストの校勘を行い、両者の違いについて明らかにしたいと思う。

三　明鈔本と談愷本系テキストとの比較

今回用いた校勘材料は以下の通りである。

《底本》

・明鈔本　　中国国家図書館蔵明野竹斎鈔本

《校勘材料》

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

・談愷本　広島大学蔵民国二十三年北平文友堂書坊用嘉靖中談愷刻本影印本
・許自昌本　内閣文庫蔵本
・黄曉峰本　清乾隆乙亥年天都黄曉峰校刊本（新興書局影印　民国五十八年）
・四庫全書本　清文淵閣四庫全書鈔本（上海古籍出版社影印　一九九〇年）
・中華書局本　汪紹楹点校本（中華書局　一九六一年・二〇〇三年重印）

本来は当然『太平広記』全巻に渡って調査を行うべきであるが、時間的制約のため、今回調査対象とすることができたのは巻三、葉数にして十一葉という僅かな分量にすぎない。しかしこの僅かな分量の中でも、全校勘箇所は四百四十八条、その内、一種類の版本としか異同が無いもの（明鈔本ではなく、そのテキストに問題があると判断されるもの）や、異体字や通用字の許容範囲と考えられるものを除いても、全部で三百八十一条もの数を得た。巻三のみという僅かな範囲でこれだけの数の異同があると言うこと自体、明鈔本は談愷本とは違う系統に属していることを裏付けているとも言える。しかもその内容を細かく見ていくと、単純な誤記と思われるものも相当数含まれているが、中には明鈔本が談愷本系とは別系統に属することを示す例も見られる。例えば、次の部分である。

《明鈔本》

元封元年、正月甲子、登嵩山、起道宮。帝齋七日、祠訖乃還。至四月伐辰、帝閑居。東方朔、董仲君在側焉。忽見一女子。著青衣、非常麗色。帝愕然問何人。曰、「我墉宮玉女姓王名登。爲王母所使、從崑崙山來。」語帝曰、「聞子輕四海之祿、尋道求生、降尊王之位、而屢禱山岳。勤哉、有心似可教者。從今日清齋、不交人事。至七月七日、王母當暫至也。」帝下席跪謝。言訖、玉女隱去、忽然不見。帝問東方朔、「此何人。」朔曰、「是西王母紫蘭宮玉女。常傳使命、往來扶桑、出入靈州、交關常陽、傳言玄都。阿母昔出配北燭仙人、近又召還、使領命祿。具靈官也。」帝於是登尋眞之臺、齋戒存道。其四方之事權、委於冢宰。

《談愷本》

元封元年、正月甲子、登嵩山、起道宮。帝齋七日、祠訖乃還。至四月戊辰、帝閒居承華殿。東方朔、董仲舒在側。忽見一女子、著青衣、美麗非常。帝愕然問之。女對曰、「我墉宮玉女王子登也。何爲王母所使、從崑崙山來。」語帝曰、「聞子輕四海之祿、尋道求生、降帝王之位、而屢禱山嶽。勤哉、有似可教者也。從今日清齋、不閑人事。至七月七日、王母暫來也。」帝下席跪諾。言訖、玉女忽然不知所在。帝問東方朔、「此何人。」朔曰、「是西王母紫蘭宮玉女。常傳使命、往來扶桑、出入靈州、交關常陽、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

傳言玄都。阿母昔出配北燭仙人、近又召還、使領命祿。眞靈官也。」帝於是登延靈之臺、盛齋存道。其四方之事權、委於冢宰焉。

これは武帝の所に王登（王子登）という仙女が現れ、七月七日に西王母が降ってくることを予告するという場面である。傍線部が異同箇所だが、かなりの数があることが分かる。その最後の辺りに「尋眞之臺」という建物が出てくるが、これが談愷本では「延靈之臺」となっている。この建物は史書には出てこない、実在かどうか不明の建物なので、どちらが正しいのかは分からない。この部分は『北堂書鈔』『初学記』『太平御覧』『事類賦注』にも引用されているので、それも調べてみると、みな明鈔本と同じ「尋眞之臺」に作っており、類書に引く「漢武帝内伝」の中に「延靈之臺」とするものは、談愷本系の『太平広記』以外には無い。そのことからすると、明鈔本の「尋眞之臺」の方が本来の形に近く、談愷本系の方が何らかの理由で「延靈之臺」に変わってしまった可能性が考えられる。

続いて、もう一例挙げる。

《明鈔本》

到七月七日、乃掃宮掖、設坐大殿、以紫羅薦地、燔百和之香、張雲錦之幃、燃九光之燈、列玉門之棗、酌蒲萄之醴、躬藍香果、爲天宮之饌。帝乃盛服、立於階下。敕端門之内、不得有妄窺者。内外謐寂、以候仙官。到夜二更之後、忽見西南如白雲起、鬱鬱直來。逕趨宮庭、須臾轉近。聞雲中有簫鼓之聲、人馬之響。復半食頃、王母至也。或駕龍虎、或乘白麟、或乘白鶴、或乘軒車、或乘天馬。群仙數千、光輝庭宇。既至、從官不復知所在。唯見王母乘紫雲之輦、駕九色斑麟。別有五千天仙、側近雲駕。皆身長丈餘、同執綵旄之五節、佩金剛靈璽、帶天眞之冠、咸住殿下。王母唯將二侍女上殿。侍女年可十六七。服青綾之袿、容胖流眄、神華發清。眞美人也。王母東向坐。著黃金錦袷襦、紋綵明鮮、金光奕奕。交帶飛火之綬、腰佩分景之劍、頭上華髻、戴天眞晨嬰之冠、履玄瓊鳳文之舄。映朗雲棟、神光暐暐。視之可年三十許。脩短得中、天姿掩藹、容顏絶世。眞靈人也。

《談愷本》

到七月七日、乃修除宮掖、設坐大殿、以紫羅薦地、燔百和之香、張雲錦之幃、燃九光之燈、列玉門之棗、酌蒲萄之醴、宮監香果、爲天宮之饌。帝乃盛服、立於階下。敕端門之内、不得有妄窺者。内外寂謐、以候雲駕。到夜二更之後、忽見西南如白雲起、鬱然直來。逕趨宮庭、須臾轉近。聞雲中簫鼓之聲、人馬之響。半食頃、王母至也。縣投殿前、有似鳥集。或駕龍虎、或乘白麟、或乘白鶴、或乘軒車、或乘天馬。群仙數千、光耀庭宇。既至、從官不復知所在。唯見王母乘紫雲之輦、駕九色斑龍。別有五十天仙、側近鸞輿。皆長丈餘、同執綵旄之節、佩金剛靈

NII-Electronic Library Service

璽、戴天眞之冠、咸住殿下。王母唯挾二侍女上殿。侍女年可十六七。服青綾之袿、容眸流盻、神姿清發。眞美人也。王母上殿東向坐。著黃金褡襠、文采鮮明、光儀淑穆。帶靈飛大綬、腰佩分景之劍、頭上太華髻、戴太眞晨嬰之冠、履玄璐鳳文之舄。視之可年三十許。修短得中、天姿掩藹、容顏絶世。眞靈人也。

これは先ほどに続いて、七月七日、西王母が漢武帝の元に降ってくる場面である。中でも注目したいのは、西王母の容姿についての描写である。明鈔本の「紋綵明鮮、金光奕奕」が談愷本では「文采鮮明、光儀淑穆」となり、「映朗雲棟、神光暐暐」の二句が談愷本系には全く見られないなど、表現に大きな違いがある。これは何らかの誤写とも、また明鈔本を書写する際に書き加えたとも考えにくい。明鈔本の元になった本はこのようになっていたと考えた方が自然だろう。

このような例は他にも幾つか見られる。以上の例からすると、明鈔本は談愷本とは別の系統に属すると考えた方が妥当だろう。そして唐代以前の類書に引かれた「漢武帝内伝」の文には、談愷本系ではなく明鈔本の方に一致する例があることも考えると、明鈔本の方が『太平広記』の古い形の名残を残している可能性がある。

四　明鈔本と宋本の比較

以上、明鈔本が談愷本系とは異なる系統に属すること、そしてそれは『太平広記』の古い形に近い可能性があることを述べた。それでは、これは宋本に近いものと言うことができるのだろうか。そこで実際に、孫校本・陳校本との比較によって、明鈔本と宋本の距離について考えてみたい。

但し先に述べたように、孫氏・陳氏が校勘に用いた宋本は現存せず、残っているのはその書き込みのみである。本来はこれらの現物を確認すべきであるが、孫氏の校勘記については厳一萍『太平広記校勘記』で整理され、[8]また陳氏の校勘記は張国風「『太平広記』陳鱣校宋本異文輯選」で一部が紹介されているので、[9]今回はそれで代えたいと思う。

『太平広記』巻三について言うと、孫氏の校勘記は二百十八条、陳氏の校勘記は十七条が挙げられている。陳氏の校勘記十七条の内、十四条は孫氏と一致するので、両者が拠った宋本は同系統の本であると思われる。それではこの宋本と明鈔本はどれくらい一致するのだろうか。そこで、孫氏・陳氏の校勘記と今回作成した明鈔本の校勘記を重ねて、その一致度を調べてみた。

まず孫校本について述べると、孫校本は宋本と談愷本を校勘しているので、明鈔本校勘記からも談愷本との校勘記を抽出して比較した。同様に陳校本についても、明鈔本と許自昌本の校勘記を抽出して比較した。その結果をまとめたのが、次頁の資料2である。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

【資料2】明鈔本校勘記と孫氏校勘記（二百十八条）・陳氏校勘記（十七条）の比較

	明鈔本・孫校本	明鈔本・陳校本
一致するもの	一七七条（八一・一九％）《四七・〇七％》	一三条（七六・四七％）
部分的に一致するもの	二〇条（九・一七％）《五・三二％》	三条（一七・六五％）
一致しないもの	二一条（九・六三％）	一条（五・八八％）

※（）内は、それぞれ孫氏校勘記・陳氏校勘記の総数に占める割合。《》内は、明鈔本校勘記の総数三百七十六条に占める割合。陳校本は巻三の校勘記全てではないので、明鈔本校勘記の総数に占める割合は計算できない。

この表からは、孫校本、陳校本の校勘記はどちらもその八割ほどは明鈔本にも一致することが分かる。しかし孫校本の校勘記について言えば、明鈔本と談愷本の校勘記三百七十六条中、一致するのは百八十一条と、実に五割を切る数である。つまり明鈔本校勘記は、孫氏校勘記の内容をほぼ全て含んだ上で、更にそれと同じくらいの数の異同があることになる。言い換えるなら、孫校本と明鈔本は同じ方向のベクトルを持つものの、明鈔本のベクトルは孫校本の二倍の大きさを持っていると言うことができる。校勘の基準の違い等も考慮する必要はあるが、このことからは、明鈔本と宋本は、恐らく同一の系統に属するものの、かなり距離のあるテキストだと考えられるのではないだろうか。

五　談愷の校訂の可能性

ここまで、談愷本系の諸本との比較や、類書所引の「漢武帝内伝」の文との比較によって、明鈔本は他の宋本系と言われるものとは違いが大きいものの、やはり宋本の系統に属するテキストだと考えてきた。しかしここで問

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

題となるのが、そもそも『太平広記』が出典としている「漢武帝内伝」との関係である。この明鈔本が『太平広記』の古い形に近いものであるとして、それでは出典である『漢武帝内伝』との距離はどの程度だろうか。続いてその問題について考えてみたい。

「漢武帝内伝」には、大きく道蔵本系と広漢魏叢書本系の二系統のテキストがある。この両者の関係は明らかではないが、ここでは類書の引用状況などから、より古い形を残していると思われる道蔵本系と比較を行う。[10]

この道蔵本「漢武帝内伝」と明鈔本の比較を行ってみると、確かに両者には共通点が見られる。

《道蔵本「漢武帝内伝」》

母自設膳、膳精非常。豐珍之肴、芳華百果、紫芝萎蕤、紛若填樏。清香之酒、非地上所有、甘氣殊絶。帝不能名也。又命侍女、索桃。須臾、以盤盛桃七枚、大如鴨子、形色青、以呈王母。母以四枚與帝、自食三桃。桃之甘美、口有盈味。帝食輒録核。母曰、「何謂。」帝曰、「欲種之耳。」母曰、「此桃三千歳一生實耳、中夏地薄、種之不生。如何。」帝乃止。

《明鈔本》

王母自設天廚。精妙非常、豐珍上果、芳華百味、紫芝萎蕤、芬芳頃樏、清香之酒、非地上所有、香氣殊絶、帝不能名也。又命侍女、更素桃果。須臾、以玉盤盛仙桃七顆。大如鴨子、形圓青色。以呈王母。母以四顆與帝、三顆自食。桃味甘美、口有盈味。帝輒録其核。王母問帝。帝曰、「欲種之。」母曰、「此桃三千年一生實。中夏地薄、種之不生。如何。」帝乃止。

《談愷本》

王母自設天廚。眞妙非常。豐珍上果、芳華百味、紫芝萎蕤、芬芳填樏、清香之酒、非地上所有、香氣殊絶。帝不能名也。又命侍女、更索桃果。須臾、以玉盤盛仙桃七顆。大如鴨卵、形圓青色。以呈王母。母以四顆與帝、三顆自食。桃味甘美、口有盈味。帝食輒收其核。王母問帝。帝曰、「欲種之。」母曰、「此桃三千年一生實。中夏地薄、種之不生。」帝乃止。

これまでと同様、異同箇所に傍線を引いてあるが、それを取り出し、近いもの同士を網掛けにしたのが次頁の資料3である。この表を見ると、基本的には同じ『太平広記』である明鈔本と談愷本が近いが、例えば「鴨子」「如何」など、明鈔本と談愷本で異同がある時、「漢武帝内伝」は明鈔本と近い字句になっている箇所が多いことが分かる。これも明鈔本が古い系統の特徴を残している証左になると思われる。

しかしここで問題になるのが、前に取り上げた「尋眞之臺」と「延靈之臺」である。ここまでの考察では、元々『太平広記』では明鈔本に見られる「尋眞之臺」であ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

【資料3】道蔵本「漢武帝内伝」と明鈔本・談愷本の比較表

漢武帝内伝	母	膳	膳	**精非常**	豐珍之肴	百果	萎蕤	紛若填樏
明鈔本	王母	天廚		**精妙非常**	豐珍上果	百味	萎蕊	芬芳頃樏
談愷本	王母	天廚		眞妙非常	豐珍上果	百味	萎蕤	芬芳填樏
漢武帝内伝	甘氣	索桃	盤	七枚	**鴨子**	形色青	四枚	自食三桃
明鈔本	香氣	更素桃果	玉盤	七顆	**鴨子**	形圓青色	四顆	三顆自食
談愷本	香氣	更索桃果	玉盤	七顆	鴨卵	形圓青色	四顆	三顆自食
漢武帝内伝	桃之甘美	**食輒録核**	母曰何謂	欲種之耳	三千歳	一生實耳	**如何**	
明鈔本	桃味甘美	**輒録其核**	王母問帝	欲種之	三千年	一生實	**如何**	
談愷本	桃味甘美	食輒收其核	王母問帝	欲種之	三千年	一生實		

ったが、談愷本に至る過程で「延靈之臺」に変わってしまったことになる。しかし実は「漢武帝内伝」についても、類書に引くものは「尋眞之臺」に作るのに対して、道蔵本「漢武帝内伝」は談愷本と同じ「延靈之臺」に作っている。つまり「漢武帝内伝」でも『太平広記』と同様に「尋眞之臺」から「延靈之臺」への変化が起こって

NII-Electronic Library Service

いるのである。これは一体、どういうことなのだろうか。

ここで一つの可能性について触れたい。「尋眞」と「延靈」は文字面も似ていないから、『太平広記』と「漢武帝内伝」の両方で偶然同じ変化が起こったとは思えない。恐らく、一方が一方を見て改めたと考えるのが自然だろう。そうなると、道教経典である「漢武帝内伝」が『太平広記』を見て改めたとは考え難く、『太平広記』が道蔵本系の「漢武帝内伝」によって改めたと考えるべきだと思われる。そして「漢武帝内伝」と『太平広記』の変化を時間的に整理すると、次頁の資料4のようになる。

この表を見ると、『漢武帝内伝』では一四〇〇年代後半までには「延靈」への変化が起こっているが、『太平広記』については、一五〇〇年代前半頃はまだ「尋眞」に作るテキストが出回っていたようである。『太平広記』での変化は談愷本が刊行された一五六六年からそう遠くない時期と推測される。

ここで触れたいのが、談愷「『太平広記』序」の次の部分である。

近得『太平廣記』觀之、傳寫已久、亥豕魯魚、甚至不能以句。因與二三知己秦次山、強綺塍、唐石東、互相校讐。寒暑再更、字義稍定。尚有闕文闕卷、以俟海内藏書之家、慨然嘉惠、補成全書。庶幾博物洽聞之士、得少裨益焉。嘉靖丙寅正月上元日都察院右都御史致仕十山談愷書。（近ごろ『太平広記』を得て之を観るに、伝写すること已に久しく、亥豕魯魚ありて、甚しきは以て句とする能はざるに至る。因りて二三の知己 秦次山、強綺塍、唐石東と、互ひに相校讎す。寒暑 再び更はり、字義 稍く定まる。尚ほ闕文闕巻有れば、以て海内の蔵書の家の、慨然として嘉恵せらるるを俟ちて、補ひて全書と成さん。庶幾はくは博物洽聞の士、少しく裨益するを得んことを。嘉靖丙寅正月上元日 都察院右都御史致仕 十山談愷 書す。）

ここで談愷は、手にいれた『太平広記』のテキストは魯魚の誤りが多い酷い状態であったので、知人と共に二年もの月日をかけて校訂を行い、なお残る闕文は、後世の蔵書家・博学の士の協力を待つと言っている。談愷自身も更に刊行後もしばしば手を入れたようで、現在談愷本と呼ばれる書には三種類乃至四種類あることが知られている。或いはこの刊行に先駆けた校訂作業で、談愷は道蔵本系の「漢武帝内伝」を手にいれ、それに拠って『太平広記』の字を改めた可能性が考えられるのではないだろうか。ただしこのように言うためには、更なる調査が必要なので、今は可能性の指摘に留めたい。

六　おわりに

以上、中国国家図書館所蔵の明野竹斎鈔本『太平広記』について若干の検討を行った結果、明鈔本は談愷本とは違う系統の、宋本と伝えられるテキストの系統に属して

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

【資料4】「漢武帝内伝」『太平広記』年表

	「漢武帝内伝」		『太平広記』	
五〇〇年代前半	『漢武帝内伝』編纂	尋眞		
六〇〇年代前半	『北堂書鈔』編纂	尋眞		
七〇〇年代前半	『初学記』編纂			
九七八年			『太平広記』編纂・宋本刊行	
九八三年	『太平御覧』編纂	尋眞		
九〇〇年代後半	『事類賦注』編纂	尋眞		
一四四五年	「正統道蔵」編纂	延靈		
一五〇〇年代前半			野竹斎鈔本書写	
一五六六年			談愷本刊行	
一五九二年				尋眞
一六二六年	「広漢魏叢書」刊行	延靈		延靈
一七〇〇年代前半			馮夢龍『太平広記鈔』刊行	延靈
一七五五年			許自昌本刊行	延靈
一七七三年			黄暁峰本刊行	延靈
一九五九年			四庫全書本書写	延靈
一九六一年			人民文学出版社点校本刊行	延靈
			中華書局点校本刊行	延靈

いるが、同じく宋本系と言われるものとは違いが大きいことを指摘した。このことからは、現在まとめて宋本と呼ばれるテキストの中にも、かなり異なる複数のテキストが存在したことが推察される。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

また併せて、談愷本と明鈔本の異同の中には、談愷によって改訂されたものがある可能性を指摘した。もともとあまりいい状態ではなかった『太平広記』を、談愷が校訂して世に出したからこそ、『太平広記』は現在に伝わるのであり、これは彼の大きな功績である。また、このように長い時間をかけて厳密な態度で校訂作業を行うということは、それまでせいぜい消閑の具程度にしか扱われていなかった小説に一定の地位を与える行為でもあったように思う。一般に、中国の古小説に関する研究は魯迅『中国小説史略』を嚆矢とするが、この談愷の態度にはその先駆けを感じとることができるのではないだろうか。彼の修訂作業を具体的に明らかにすることは、今後の『太平広記』のテキスト研究のみならず、小説観の変遷についての研究にも大きな意味を持っている。

今後はまず、明鈔本の全体的な調査、更に今回は充分には扱えなかった孫校本・陳校本に対する調査も行い、『太平広記』のテキストに対する総合的な調査を行う必要がある。それは『太平広記』研究のみならず、小説研究全体に資するものである。

(注)

① 愛宕松男『アジアの征服王朝』(世界の歴史11　河出書房新社　一九八九年)一一八頁に、以下のようにある。

あるいは、『文苑英華』、『太平御覧』、『太平広記』といった一〇〇〇巻、五〇〇巻の巨大な類書の編集事業を興して、学者を総動員するなど、すべて士大夫、すなわち官僚層の懐柔のための露骨な政策であった。

② 現代中国語訳の代表的なものとしては、陸昕・郭力弓・任徳山主編『白話太平広記』(北京燕山出版社　一九九三年)、周振甫主編『白話太平広記』(中州古籍出版社　一九九三年)、高光・王小克・汪洋主編『文白対照全訳太平広記』(天津古籍出版社　一九九四年)、丁玉琤等主編『白話太平広記』(河北教育出版社　一九九五年)などが挙げられる。

邦訳としては、広島大学漢文研究会『『太平広記』女仙部訳註』(私家版　一九九八年)、木村秀海・堤保仁『訳注太平廣記　鬼部一・二・三』(やまと崑崙企画　一九九八年・二〇〇一年・二〇〇四年)、塩卓悟・河村晃太郎『譯註　太平廣記　婦人部』(汲古書院　二〇〇四年)、今場正美・尾崎裕『『太平広記』夢部訳注稿』(中国藝文研究會　二〇〇五年)などがある。また現在、『太平広記』研究会が『中国学研究論集』10号(広島中国学学会　二〇〇二年)より『『太平広記』訳注』を連載中である。

③ 張氏は『太平広記』のテキストについて多くの論考を発表されているが、近年発表された『太平廣記版本考述』(中華書局　二〇〇四年)でそれらをまとめられている。近年日本で発表されたものとしては、富永一登「『太平広記』の諸本について」(『広島大学文学部紀要』第五九巻　一九九九年)、佐野誠子「台湾大学藏孫潜校本『太平広記』について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第4号　二〇〇一年)、溝部良

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

恵「成任編刊『太平広記詳節』について」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第5号　二〇〇二年)などがある。また注②に挙げた塩卓悟・河村晃太郎両氏の著書にも『太平広記』の諸本について詳しい説明がある。

④　『玉海』所引『宋会要』には「興國二年三月、詔昉等取野史小説、集爲五百卷。五十五部、天部至百卉。三年八月書成、號曰『太平廣記』。六年詔令鏤版。」(興国二年三月、昉等に詔して野史小説を取らしめ、集めて五百巻と為す。五十五部、天部より百卉に至る。三年八月書成り、号して『太平広記』と曰ふ。六年詔して鏤版せしむ。)とあり、完成して三年後の太平興国六年に版木に彫られたとしており、『太平広記』序文の記述と一致しない。またここに言う「天部より百卉に至る」のは『太平広記』ではなく、『太平御覧』のことである。

⑤　孫潜校本については、注③に挙げた佐野氏の論文を参照。

⑥　注③に挙げる張氏の前掲書を参照。

⑦　注③に挙げる張氏の前掲書二十一頁に「如果我们将Y本和S本対照一下，看到二者大量相同的异文，便可以确信，Y本的底本乃是一个宋本(或元本)。」とある(Y本は明鈔本、S本は孫潜校本のこと)。

⑧　『太平廣記附校勘記』附録「嚴一萍先生太平廣記校勘記」(藝文印書館　民国五十九年)。

⑨　張国風「『太平広記』陳鱣校宋本異文輯選」(『北京図書館館刊』一九九五年三／四期)。この校記は張氏の前掲書にも収められている。

⑩　両系統の「漢武帝内伝」は、単に字句に多少の異同があるというレベルの違いではない。広漢魏叢書本は『太平広記』からの抽出本だと考えられるが、分量的に見ても、道蔵本の一万四十七字に対して、広漢魏叢書本は五千八百四十八字と、六〇パーセント余りしか無い。しかし、分量的には少ない広漢魏叢書本にのみ見られて道蔵本には見られない部分があったり、また内容的には共通している部分でも、文章が甚だしく異なっている部分もあり、単純に広漢魏叢書本は『太平広記』が道蔵本から節略したものだとは言いきれない。清の銭熙祚の守山閣叢書本は、原型に近いと考えられている道蔵本を元にして広漢魏叢書本と逐一校勘を注記した上で、道蔵本の不足部分は広漢魏叢書本から補ったものであるが、やはりこの両系統の違いについて詳しく論じてはいない。

(附記)
本稿を執筆するに当たって、首都師範大学外国語学院日語系の李均洋教授、ならびに中国国家図書館報刊部副主任の王志庚氏に図書閲覧の便を図っていただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

NII-Electronic Library Service